

翻刻・小津久足「桂窓一家言」：（上）

菱岡，憲司

<https://doi.org/10.15017/4742032>

出版情報：雅俗. 14, pp.50-67, 2015-07-17. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



翻刻・小津久足「桂窓一家言」(上)

菱岡 憲司

小津久足「桂窓一家言」を翻刻紹介する。紙幅の都合で掲載を二回に分ち、条番号の1～100までを今回の掲載分とする。

小津久足(桂窓、一八〇四―一八五八)は、六代目小津与右衛門として生業の干鰯問屋を営むかたわら、文事に親しんだ。生涯に四十六篇の紀行文を綴り、八万首の歌を詠み、古今の稀書を蒐め、馬琴と小説に關する評答を交わした。文学・文化にまつわる久足の興味は多岐にわたるが、右の紀行・詠歌・藏書・小説受容の四つの営みが文事を中心といえる。

先般、縁あって小津与右衛門家の現当主小津陽一氏の知遇を得、小津家に残る久足関連の資料を調査する機会を賜った。この度、翻刻紹介する「桂窓一家言」もその一つである。貴重な資料の調査・翻刻の許可をいただいた小津陽一氏に、この場を借りて深く御礼申し上げます。

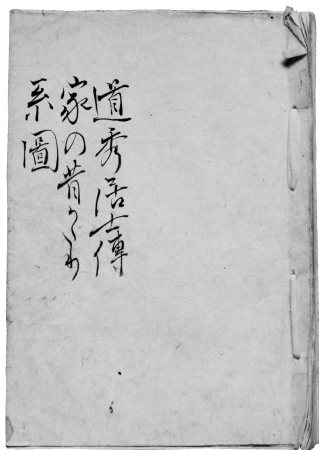
小津家に現存する小津久足関連資料のうち、「道秀居士伝 家の昔かたり」のみは、すでに小泉裕次氏による翻刻紹介が備わる(「小津久足自筆稿本『小津氏系図』と『家の昔かたり』について」(二二)「鈴屋学会報」4・5、S 62・7、S 63・7)。詳細な解題と久足の年譜を付した小泉稿は、久足研究の基本文献であるが、おそらくは、小津与右衛門家の探究を第一義としたため、当時から小津家に伝わっていた他の資料には

あえて言及しなかったようである。しかし、文学研究の立場からは、未紹介の文献にも多くの価値が見出せ、紀行・詠歌・藏書・小説受容いづれについても新知見をもたらす貴重な資料群である。

以下、小津家に現存する久足関連資料の書誌を記す。

道秀居士伝 家の昔かたり

三代小津与右衛門(理香、道秀居士)の伝記「道秀居士伝」と、小津与右衛門家の記録「家の昔かたり」を所収。系図の記載なし。詳細は小泉稿を参照のこと。二卷一冊。25・5×17・5 糎。仮綴・袋綴。共表紙。外題「道秀居士伝／家の昔かたり／系図」。内題「花山道秀居士伝」(一二丁)。一〇行。後表紙とも五一丁。奥書「弘化三年丙午七月／六代小津与右衛門久足謹誌」。「家の昔かたり」の内題なし。



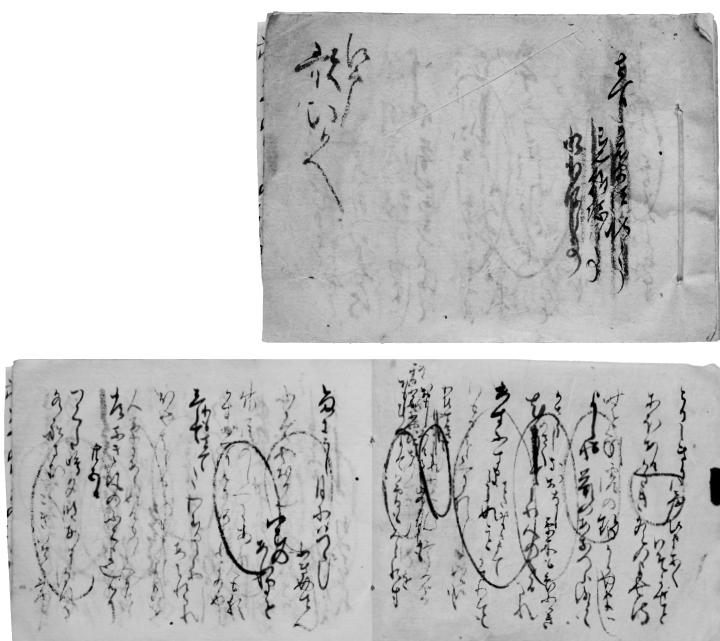
桂窓一家言草稿

小津久足による歌論書。一冊。25・5×17・4 糶。仮綴・袋綴。
共表紙。外題「桂窓一家言 草稿」。内題なし。四二丁。反故の紙
背を利用。



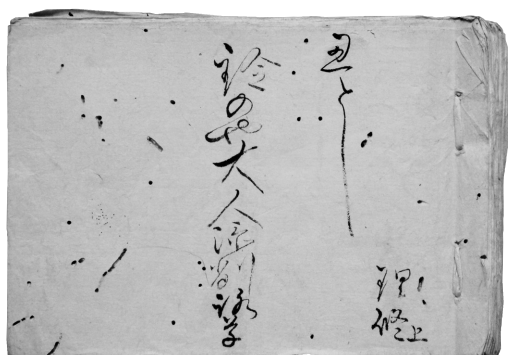
江戸歌ひかへ

小津久足詠草。一冊。12・2×16・6 糶。仮綴・懷紙綴。共表紙。
外題「江戸／歌ひかへ」。前表紙とも一六丁。



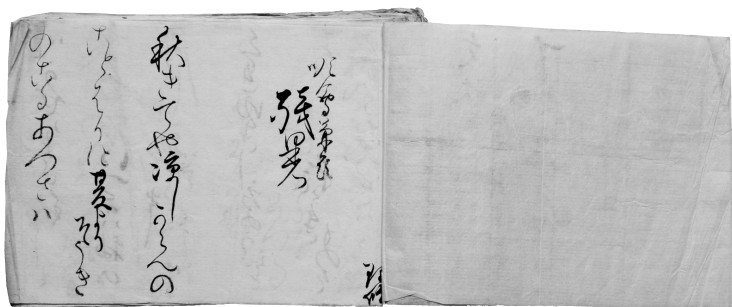
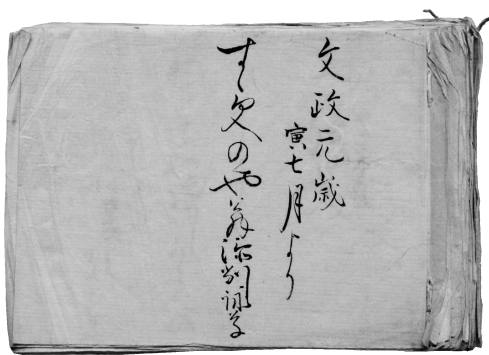
〔小津理修詠草〕

小津久足の叔父、小津理修まさのり（五代目与右衛門、守良）の詠草。本居春庭添削。一冊。12・3×17・5 糎。仮綴・袋綴。共表紙。外題「理修／上／丑とし／鈴のや大人添削詠草」。内題なし。後表紙とも五九丁。



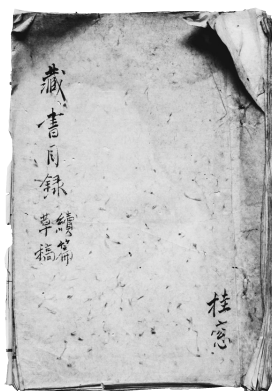
〔小津理修詠草〕

小津理修の詠草。本居春庭添削。一冊。12・0×17・3 糎。仮綴・袋綴。共表紙。外題「文政元歳／寅七月より／すずのや翁添削詠草」。内題なし。六九丁。



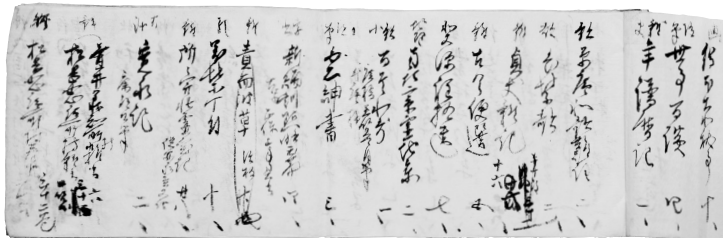
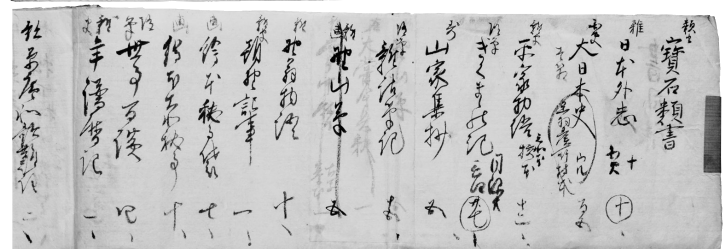
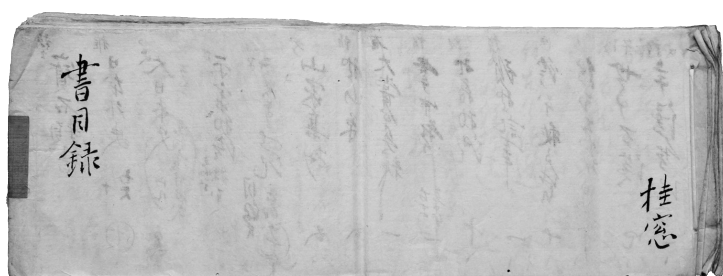
蔵書目録続篇草稿

西莊文庫目録の草稿。一冊。25・3×17・4 糶。仮綴・袋綴。共表紙。外題「桂窓／蔵書目録〔続篇／草稿〕」。内題なし。半葉縦五行×横三列、柱に「桂窓」とある野紙。匡郭17・7×12・7 糶。二二丁半。構成…神典・国史・雑史・有識・氏族・和歌・和文・字書・地理・雑・好古・図。



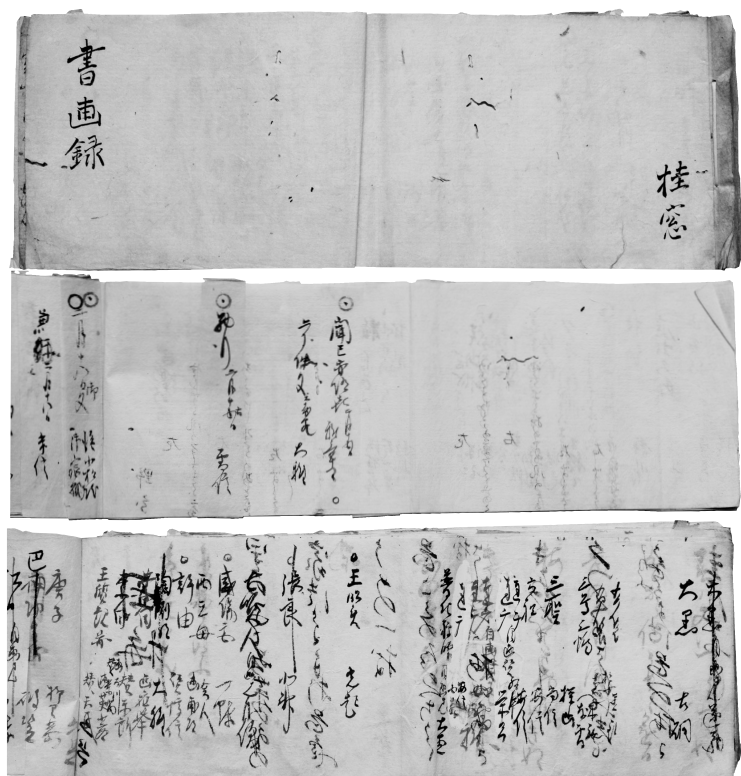
書目録

西莊文庫目録。一冊。12・4×34・9 糶。仮綴・懷紙綴。共表紙。外題「桂窓／書目録」。内題なし。両表紙とも四五丁。



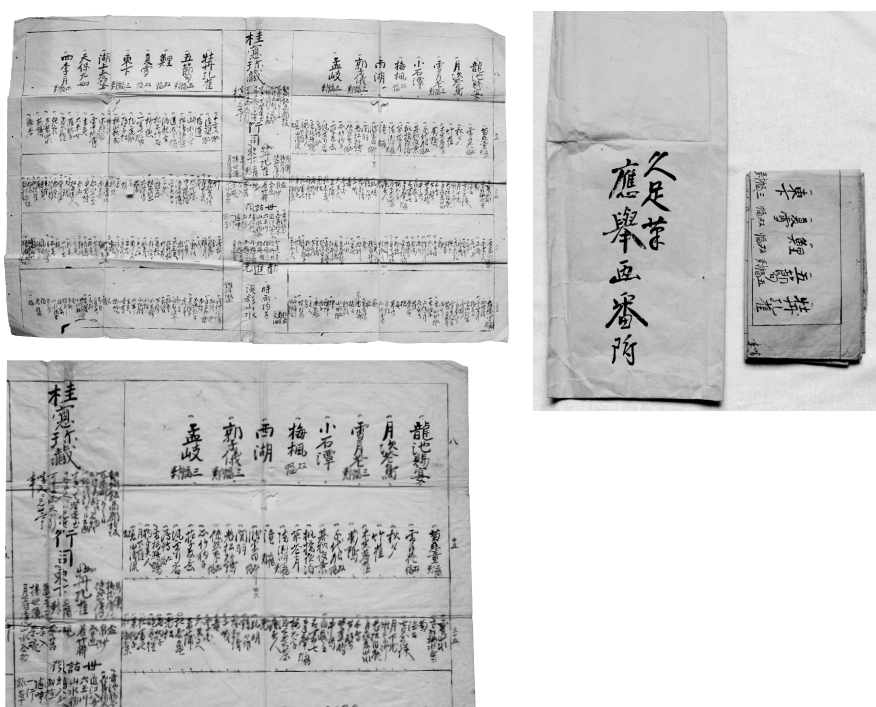
書画録

小津久足所蔵の書画目録。一冊。12・0×33・8 糶。仮綴・懷紙綴。共表紙。外題「桂窓／書画録」。内題なし。両表紙とも二六丁。付箋多し。



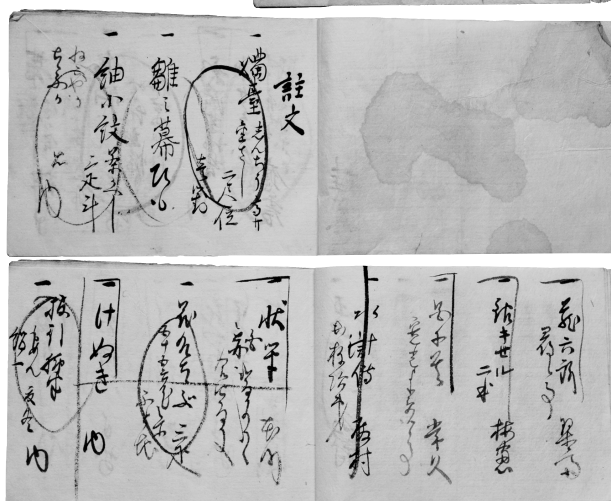
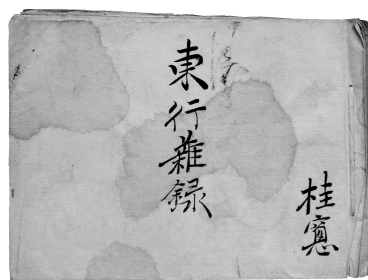
久足筆応挙画番附

小津久足所蔵の円山応挙書画番付。一枚。38・0×58・3 糶。



東行雜錄

松坂より江戸店へ赴く折の手控。一冊。12・1×16・6 糶。仮綴・懷紙綴。共表紙。外題「桂窓／東行雜錄」。内題なし。三三丁（墨付二三丁半）。見消多し。



今回、まずは「桂窓一家言」を翻刻する。他の資料についても、小津陽一氏の格別のご高配により、順次、紹介していく所存である。なお、「桂窓一家言」の内容解説は、次号の解題に譲る。

また、右以外にも、小津家には以下の資料が伝わる。

嘉永二年己酉四月十九日／円山家展観

一冊。版本。14・0×10・0 糶。袋綴。浅黄色無地表紙。外題「嘉永二年己酉四月十九日／円山家展観」と打付書。内題「円山応震十三回忌追福遺墨展観」。序八行、本文八行。構成…見返し半丁・序一丁（弦堂山本秀夫）・本文一七丁・跋一丁（不肖孤応立拝撰）。

応挙画展覧会出品目録

一冊。版本。18・1×12・2 糶。袋綴。薄桃色無地表紙。外題「応挙画展覧会出品目録 全」墨識語「卅三年再三調査／卅四年八月記焉」。内題「〔明治／廿二年／五月〕 応挙画展覧会目録」。八丁。刊記「明治二十二年五月十七日印刷／非売品／所藏者／三重県伊勢国／小津与右衛門／印刷所／東京京橋区西紺屋町廿六七番地／秀英舎」。

桂窓好鯉封筒

20・0×4・4 糶。「桂窓好／金花堂製」。

菊銘記

三代小津与右衛門理香による菊名目録。一冊。8・5×22・1 糶。仮綴・懷紙綴。共表紙。外題「菊銘記」。後表紙とも一〇丁。

〔円山応挙画幅目録〕

八代小津与右衛門による応挙書画目録。一枚。66・7×48・9 糶。別紙の下書に「茲ニ掲ル応挙画傑作トモ云ベキ画幅ヲ藏中ヨリ撰

抜シタ画幅也。八代与右衛門誌」とあり。

〔画幅目録〕

一枚。28・3×20・2 糎。日本美術協会野紙。片面八行。

那智瀧一首并短歌

小津久足歌軸。一軸。105×36・7 糎。

桂窓翁和歌一首

小津久足歌軸。一軸。35・4×51・0 糎。「かずならぬ／身のおもひ出も／なき世かは／芳野の桜／さらしなの月／久足」。

烟草といふものをよめる長歌みじか歌

小津久足歌。一枚。26・5×50・3 糎。

凡例

- 一、小津家所蔵「桂窓一家言」を底本とした。
- 一、底本は草稿につき推敲の跡が甚しいが、訂正後の文字を翻刻し、見消・抹消等は省略した。
- 一、適宜、句読点・濁点・括弧を加えた。
- 一、漢字は通行の字体を用いた。
- 一、「ゝ」「く」は残したが、漢字の後の「ク」「ク」等は「々」に統一した。
- 一、判読不能の箇所は□にて示し、判読できない理由を（ ）内に傍書した。また、字の一部より推定した文字は□で囲んだ。
- 一、条ごとにアラビア数字で番号を振り、条が移るごとに一行空けた。

1 歌は自然を第一とす。その訳は、元祖と尊奉 ヤツレ 結句
その「八重垣を」の「を」文字に意味ふかくこもれり。これ歌の大事
にて、この御歌などは、たくみにせんとて神のよみ給へるにはあらず。
たゞありのまゝ、よみ給ふ中、わづか一字に意味いひしらずふかきを
勘みるべし。

2 歌よむ輩、かりにも人の歌を添削すべからず。又かりにも師とな
ることを心がくべからず。人の歌をなほせば、夫にて執行（ゴウ）になること
もあれど、おほくは人の難をいふに付ては、わが難をいはれじとする
より、自然にわが歌がつぐむなり。歌は難をいはるゝことをいとひて
は、わが力よりははるかにわるくなる也。たゞ難をいはるゝをかまは
ず、ほめらるゝを心がけず、やりはなしてよむがよし。古人すら今の
人の難をまぬがれず。まして当時之歌よみはきづ（マユ）のなき歌は出来がた
し。きずのなき平意歌よりは、きずのある一ふしある歌の方まされり
とおもふべし。

3 定家卿の諸道一致といはれたるは、第一の教也。歌の道になづま
ずして、ひろく書を見るがよし。ことにみべきは詩文章之類、又は連
歌之書、俳諧も芭蕉時代之書はみるがよし。

4 人にほめらんとおもひてよむは大にたがへり。わらはれまじとお
もふもたがへり。難をいはれじとおもふもたがへり。たゞわが性を性

として、他にかゝはらずによむがよし。わらはれじ、ほめられん、難
をいはれじとおもふ人は、歌をよまぬがよし。人のそしりをおそるれ
ば、おもしろき歌はとても出来ず。これさわりおほければ也。八分の
歌ならば、おもしろみなくとも難はあるべし。難ありとも十二分（マ）を
心がくべし。

5 歌は達者によんで、あだ矢の多きがよし。一々金玉をつらねんと
おもへば、歌はたくみにても、星眼のめからみると愚にして、みな死
物也。練ことはことにあしゝ。歌は心ざしをいふが主なれば、三十一
文字腹から出た所が、たとへていはゞ人の生れたる所のごとし。手は
手、足は足とむまるゝものにてはなきをおもふべし。されば、始おも
ひつきたる歌を、こゝをなをしそこを直して練人は、歌はよくなりて
も、これ人形のごとし。人形はかたちよくてもこしらへもの也。たと
へていはゞ、まことに生たる人のごとくうるはしくつくりたる好人形
にても、醜女に猶しかざるをおもふべし。今の宗匠は言葉のきりうり
をして弟子にかはするものとするべし。

6 鏡花水月とは、詩をつくる法にして意味おもしろし。この句の意
味を味（マ）しらば、自然の所にいたるべし。されど当時の人のうたは、紙
にてつくりたる花、銀の紙ではれる月のよふにて、やゝもすると芝居
の道具だてといふものゝやうになるがおほし。

7 歌は五味のごとく、性得、苦きをこのむと甘きをこのむとがある
もの也。此うま（マ）れくてもちたる性は、どふもなをりがたし。師たるも

のは、その五味をよくくひわけて歌をなすが大事のことなるを、自
があまりがすぎる師匠は、弟子のにがいのをあまひやうにするが常
也。わらふべし。

8 古き書をよむに、わからぬ所はわからぬでおくがよし。今案をく
わへて注するほど無益なることはなし。先達もわからざるから注がな
き也。もとより注尺は無益のものにて、おほくは人を迷すの障となる。
自一箇の見^み□□第一とすべし。

9 歌の難儀は自分の才の十分にあらはしがたきを難とす。これは詩
や俳諧とすこしことなる所也。この所をよく考て随分才のあらはる、
様によむを手柄とす。

10 歌をねる人は醜女の粧の長きに類す。粧ふ間の心は、わがかほの
見にくきをよく見せんの意にて殊勝げなれど、鏡台をたつ時の心は、
もふこれでよいとおもふはいとあつかまし。歌をねるもその通にて、
もふはこれにてきはめたりとおもふは、いとかたはらいたし。たゞ一
首の歌にぐづ／＼こる愚人が千日か、つたとて、よき歌の出来るはづ
はなし。醜女が千日よそほふても、美女にならぬをおもふべし。燈下は
あざむくとも、白中の笑をまぬがれず。うたは白中を愚眼^{愚眼}の人に比す。

11 活花もなげいれは自然にてよし。遠州流などいふものは、一葉は
百枝になり、水仙がまがり、一向性をうしなふ也。歌も遠州流がおほ
きはなげくべし。

12 「不用意を得たり」とは、李于鱗が李白をほめた詞也。この一句よ
きをしへ也。歌もこれをおもひて、練て益なきことをしるべし。

13 上下かけ合に知脉などいふこと歌にいへど、これは脉があるやら
ないやらにて、何となくかけ合たるをよしとす。脉の人のめにもみゆ
るは、これ病とおもへ。これ又人の体のごとくなり。かけ合いも別に
まうけたるはあしく、縁語もおなじこと也。自然に縁語かけ合の具し
たるをよしとす。これ又五体のごとく也。五体も自然にて別につくり
たるものにはあらず。

14 歌は旅行の道のごとく、たえずさへよめば自然に妙境にいたる。
しひて妙境をえんとするは理にたがへり。心のどかに妙境にいたるを
まつべし。

15 たゞ歌はおほくよむをよしとす。あだ矢ありても其内的にあたる
ことあり。

16 人の歌をみるには、ほめんとおもふてよき所を見いだす心得にて
見るべし。難じんとおもへば、理窟におちておほやけのろんたらず。

17 きずありとて、その人の歌をおとしめることなかれ。古人の金玉
にもなほきずあり。まして後人の瓦礫をや。

18 人の歌を難じんとおもはゞ、先作者にあひて、とくと意味を聞

たゞしたるうへにて論ずべし。さなくては心得ちがひあるものぞ。まして記行中などのうた、わがいまだゆかぬ所のうたなどは、猶更のこと也。

19 論をすること第一の惡癖也。論はつきがたきもの也。われ論じえたりとおもふとも、具眼の人に見せば、批判あることをいかでまぬがれん。

20 てにはは音曲の調子のごとく自然のものにして、あふが定理、ちがふが理外也。それをさまぐの書^(ムシ)こしらへて、てにはを論ずること愚のいたり也。書を見ずしては、てにはと、のはぬ万人は、一生のうちには万巻の書よみたるとも、てにはのと、のはぬものぞ。

21 語の意をくはしく論ずべからず。いかばかり伯識^(博識)□□ありとも、「い」といふはなんといふ意味、「ろは」いふは何といふ意味といふことはわかるまじ。されば詞はそのまゝにして、古人の遺様にしたがひて理をきわめずによむがよし。

22 歌の中に漢語をまじゆることかまはぬこと也。先珍重すべき流^(流)不得・力士舞・周防なる餓鬼など例ありて、かぞへあぐるにいとまあらず。それをしらずにしひて和訓にするは愚也。仮名も元は音をかりたるものなるをや。音をしひて訓にするは、詩人の地名を無理に音にして字をこしらゆる類にて、おほやけならず。

23 人の歌を難ずるは、おほくはわが意にかなはぬことをして難とす。これ大いなるわたくし也。われは茶がすすきでも、人は酒のすすきなるがとし。草木も上えのびもの^(る)と横にはふものあるがとし。

24 講釈などきくも愚也。講釈をきかねばわからぬ位の人、とても上達はおほつかなし。それより講釈^(マ)にき、にゆくひまを、家の中にて閑に書をよみ、よく考へて、その上わからぬ所は師にきくがよく、読書百遍その意に通ず^(通)といへば、成丈は自身が考見よ。付やきば、やくにた、ずとおもへ。

25 歌をよみ書をよむ輩、拙を藏することを要として、才を現すことを要とすることなかれ。才^(才)をあらはんとすれば、愚をあらはすことおほし。

26 師となることを心がくべからざるといふは、なまじみの学問にて人をさとせば、わが一人のあやまりを衆人につとふ。わが一人の誤はさのみとがむにたらねど、衆人にあやまりをつたへんことををそる。

27 てには、達意の上にてなきもの也。詩人がわが詩を和訓にとなふるをきくに、てにはちがい語をなさぬことをきかず。是意通ずれば也。その詩人に歌をよますれば、必てには、ちがふもの也。これは意の達せざるにあり。此所ふかく考て、てにはは規矩にか、はらぬものとしるべし。

28 ある説に、書は尊田親王よりあしくなり、画は探幽よりあしくなるといへる、尤なり。歌も本居翁より風あしくなる。これその人のあしきにあらず。学ぶ風のあしきにて、その説になづむ也。そのうへ英男は自然にわが風におよぼさんことをはかるはにくむべし。たゞ自立して、誰の風によるとなく、□^{（ふ）}来の名人のよきところ^{（ふ）}にめをつけてよめば、一見識の歌は出きるもの也。歌の風を一転すること、其人のほまれなれど、さまたげはいとおほかり。心すべし。されど是は一転する人より殊さらにわろし。

29 歌をよむには、我意をたて、古人の糟粕をなむべからず。人にをしゆるには、我意をすて、古人の糟粕をなめさすがよし。

30 歌はたゞ自然を第一として、さつとよむがよし。其中には自然の意味出来るものなり。山海珍味も平用にたらず。一飯命をつなぐの用をなす歌は、白米のごとくにても黒米のごとくにても、よむはよし。珍味に似たるは賞する類にあらず。

31 『万葉』時代の俗なるをみよ。情は後世の歌に百倍せり。情は『万葉』を学て趣向は今のよによむをほまれとす。これ所謂、奪^{（奪）}体^{（体）}換骨。当時は奪体奪骨おほくして、換骨をしたる人すくなきは、なげかはし。

32 和学者といふものは昔なきものを、今のよに第一の様に和学者達がさわぐはいかゞ。むかしも大学寮に和学者あるをきかず。今も聖堂に和の道をとかるゝをきかず。これは自然、この国にぐしたるものに

して、つくりものにはあらぬ。近世、変なる一つの名目出来たるは甚ふしぎにて、かたはらいたきこと也。

33 和学者が、からをそしるもおかしく、又儒者が日本国をおとしむるをかし。まことに皇統の一すぢに神代よりたえさせたまはぬは、から国のおよぶべきことにあらず。又文化の盛なることは、日本のおよぶべきにあらず。歌も文も文華のうちなれば、歌人の漢意をそしること心あるべし。

34 当時のうたは、おほくはつくりもの也。されば漢学なくては歌のためにあし。儒もかゝる泰平のよにむまれて、わが国のむかしの治乱得失を学問ありたきもの也。

35 机上にかゝりて筆とるものは、唐人の才をうらやむべし。筆硯にあそぶことは、いかにしても唐人の日本人にまさることゝほし。

36 類聚之書、近來追々に出るは人を文盲にするかたにもあれど、又調法なり。これは類聚ものを見ずになにごとくも分明なる位に博学ならばよけれど、さなくばなほ類聚ものを見るがよし。類聚ものをも見ぬ人には猶まさるべし。

37 『詞の玉の緒』はいふにおよばず、『あゆひ抄』『かざし抄』『詞のやちまた』必見るべき書にあらず。これは、てにはを死物にしたるものにて、活語といふは、則死語也。たゞ古歌をおほく空覺して、ゝに

は、詞の遣ひ様を味ふるにしかず。

38 題詠の歌はむつかしく、実詠はやすし。それは眼前にあるものと眼前にないものをまうくるにあり。実詠はよみ歌等かぎり。題詠はつくりうたならではゆるさずしては、力量あらはれがたし。されど題詠も、山花ならばよしの、花みし時のことをおもひ、浦月ならばあかしの月みしことをおもふがよし。さはいへ、俳人が芭蕉が詞をとめて行脚などとして、自然実景もみたれど、歌よみは不風流にて、名所古跡を見んより人の歌の難をいひ、てにはがちがふとやらいふこと計を論じて、所謂こたつ弁慶也。これによりて自然実景にうとければ、この雅地にいたりがたし。歌人とても、とかくに山川の風流行脚せずしては、歌が不風流になる也。西行は所々行脚せられたれば、歌も風流にて勢あり。その西行の風を歌よみはまなはずして、連歌師の宗祇、俳人の芭蕉にとられたるは、尤歌よみのつたなきことの第一等也。実詠にはさすがに実になはぬこと(ツマ)もなけれど、題詠には実にあはぬがおほし。

39 詩は韻字平仄等ありて、入ればかへつてやすし。歌はてにはあれど、これその類ならねば、どこまで入てもむつかし。よく工風(ツカ)すべし。

40 和文は漢文を意としてかくべし。男子が『源氏』の風をまなぶはかたはらいたし。『源氏』ほどに人に妙ならぬ書はなし。歌の風をよはくし、又男の文を変生女子の様にする。たゞ文にてたふとむべきは、『平家物語』『方丈記』『枕草子』『つれづれ』、ちかくは長嘯子の文

などめでたし。

41 むかしよみたる書を今猥に論ずべからず。年々執行にてめがあらば、むかしみし見にて論ずると大に意がたがふこともあり。書を論(ムシ)じことおよばじ。今目前にみて再みて論ずるがよし。書は同書を毎年よみたけれど、それでは外の書をよむひまなければ、一度よんだる書は先本箱へ入て、しみにくはすることなくすぐしたるあれば、わからぬなどいふことはいふべからず。今よめばわかること多し。

42 蕉門の俳諧は当時の人はおよぶ所にあらず。その後の俳諧は論にたらず。これも士朗より一段あしくなりたり。今のよの俳人はそれるとも、古人の俳諧をそしるべからず。古人の俳諧は歌人のおよばぬ手段あり。『風俗文選』をみよ。『源氏』になづんだる和文のかけてもおよぶ手際は。昔の俳人は学問をかくしてつくり、今の俳人は学問のないのにあるかほをする。尤にくむべし。

43 『太平記』あるに付て『前太平記』『後太平記』をつくりたり。(アキ)といふ奴ほどにくむべきはなし。『前漢書』『後漢書』いふ例さへあれば、並々の人は真書とおもふなり。あゝ、かなしむべし。

44 延喜已来の国史が誤なるかならぬか、なほさら人がまよふ也。日本(ニッポン)のことをしらんとおもはじ。

45 『日本史』又は『王代一覽』などをみたし。『本朝通鑑』めでたき

書なれど、皇国を呉大伯末といひたるたは□□^(レ)よりてよにひろまらず。をしきこと也。道春先生にはさばかりの誤なかりしかど、林家も後代にいたりてかゝる誤あり。これ唐風に解たる誤也。

46 歌は五体の外ならねば、たゞ自然をたふとぶべし。たくみは第二、たくみにもなくおだやかなるは第三也。さるをたくまんとして、月をあかきといはんとしては、赤きもの、よふにのみなどする類、いかほど歌はたくみでも、とるにたらぬことぞかし。柳は緑、花は紅といふは、歌のうへにもあること也。

47 八代集はいふにおよばず、二十一代集、その外家々の集、尤手本として、時々の風体のうつりかはりをよく考みよ。『金葉』『詞花』『玉葉』『風雅』は歌に器量ありて、一ふしあること尊ぶべし。俊頼は尤名人、鎌倉左大臣は見識あり。西行は凡調にあらず。為兼卿は名人也。この卿は歌のみならず、志しのたかく^(御方)を^をかしきこと『つれづれぐさ』をみてもしるべし。尤資時卿のことを、しかぐいはれたることばも、よく情をうかみたり。こゝらは歌道にもかけて味へみよ。

48 風流幽閑は尤珍重すべし。窮理議論は歌のうへに□^(ひ)からず。

49 硯風致ちかき歌にても韻ある歌尤よろしけれど、今は風致歌韻は下手のかへ名に遣ふもおほし。心せよ。

50 歌合の評ほど費なることはなし。むかしのごとく左右つくりもの

などありて、風流をきそはせたるは尤珍重すべけれど、中昔より評者判者などありて、□^(ヒ)事訴訟のごときものになりて、理のある方がかつは尤いよなること也。その臭氣今に転じて、歌商人の名売、歌公事師のおほきはなげくべし。好憎を主也。

51 歌をよむには、猪と蟹を手本にすべし。すぐにゆく計でもゆかず、横にもゆかねばならず、一方かけては□□^(ムシ)しがたし。

52 歌は曲物をつかねるがごとく、詩は箱をさすがごとし。

53 冷泉為村卿に人が道をとひし時、『この花はあたこの山の山ぎくら人のくれしをまゐらする也』これが則歌也』とおほせられしこそ、千古の金言、自然を尊む鑑とすべし。

54 歌はとゝのひすぐれば俗になる。風韻すぐれば□^(ム)うすくなる。たくみすぐれば実にくとなる。用心すぐればおもしろみすくなくなる。めづらしすぎれば異体になる。ねりすぐれば死物になる。情をうがちすぐればいやしくなる。趣向すぐればこしらへものになる。

55 歌よみに好と執心あり。好なる人は、必下手なるもの、執心なる人は必上手なるもの也。それは好は歌にふけりてくるしまず、執心は歌をつ□□^(ムシ)て歌にくるしめば也。歌でたのしむやうにては、一生出来ぬもの也。下手の横ずきといふはよし。すきこそもの、上手なるといふはたがへり。執心こそもの、上手なれといふべし。

56 常々書をよみてくるしむべし。歌をよむ段にあつては、書をもみず、くるしまずにやすくとよむべし。常々くるしまずに、歌よむ時計くるしんでは出来ぬもの也。作例も常々みて歌よむ時にはみるべからず。歌よむ時は戦ひのごとし。

57 風景おもしろき海山に行たらば、十分にめをこらして、歌をよまんとおもふべからず。歌をよまんとすれば、風流をうしなひて、そのけしきもよそになるもの也。ふと出来たらばよし。出来始は期してよむがよく、よまでもことたりなん。おもしろき風景は後の題詠の料にするにはしからず。

58 鶯をかふ人は引板かけて花に来る鶯をおひ、菊を賞する人は花を心なくきりとる。これそのことになづみて実をうしなふ也。歌もやぶ鶯の自然の声、菊は花を賞するといふ所に比してよむべし。

59 上代の人の心はなほくして、教なくてよろしきを、世くだるに付て、この国には教なければ儒教仏教のはびこりたるはよし。それにその二教をにくみて、古学じやの、大和魂じやの、直日霊じやのといふものをこしらへて、上古にかへさんとするはわらふべし。今のよに上代のをしへをもてきたらば、一日をもさまるべからず。二教のあるは中々よろしきを、それを破らんとして、二教の道はいらぬものなどいふは、かたはらいたし。道といふこと、この国にはもとよりなければ、二教の道が則道也。この道を破する老莊の道とはことにして、いとなし。老莊はたふとぶべし。近來のやまとだましるとかいふ道はた

ふとみがたし。

60 歌よむ人は、初心の歌、又は氣にいらぬ歌を見て、これでは歌にならぬ、など、よくいふもの也。これは甚たがへることにて、三十一字、字さへならべば、たとへ、てにはと、のはずとも歌也。古人も「鶯と蛙をさへ」などいへり。

61 字あまりの格は西行にならひて、「あいえを」の文字なくともよむべし。古人のいはぬこと也ともよむがはたらき也。まして古人の例あれば猶かまはぬこと也。西行の歌、字余りを悪風といふは、大なるわたくし也。

62 『言の葉の玉緒』に、変格と、てにはちがいとをたてたるは、これわたくし也。変格をたつるからには、てにはちがひも変格に在るべきはづ也。詩人も平仄のたがへるが故人の詩にいとほし。これ詩の幽玄にいたりてふと吾をわすれたるおもしろみ意外にあり。歌のてにはちがひもその類也。趣向は黒木のごとし。夫に墨を打、かんなにてけづるまでがうた也。夫をみがくは木賊にかけるにひとしく、かへつて自然の趣を失す。

63 「ちりにしはる」などいふことよみてくるしからず。古人の例あれば、何もかまわぬことなるを、よむがあしきといふことわたくし也。

64 かけ合はあるかなきかの所を要とす。意味は聞ゆると聞えざるの

間を要とす。かけ合むげになきはあしく、かけ合ありすぎたるもうるさし。聞えぬもとるにたらず。聞えすぎたるは俗にちかくあさし。

65 歌を歌麗(華力)にせんとおもふは、料理人のみえをよくせんとして、半熟のものをくわするにひとし。さまはあしもよく熟したるを要とす。

66 英男人をあざむくといふ言にくむべし。ちかくは本居翁も徂来(マ)もその類なり。わが才ありとも、英気をあらはさずして、たゞ英男にあざむかれぬよふにするがよし。日後にアリ

67 琴柱にかはすることなかれ。されど琴柱のすへ所を我意もてかへるはあし、。

68 近來の歌人の論、古学者の論、うへは大和魂となへても、皆儒学の糟粕をなめて、おほくはりくつ也。意中の非をのみいひて、意外の意をしる人なし。

69 不解の所は難じて、不可解所の難をしる人なし。過去現在未來・自他を、てには者流にことごとしくいへど、なんでもないことにて、俗言に、過去「ゆふべはけしからぬ風でござりました」、雅にうつせば「よべはあらき風なりし」。現在「今日はよい天気でござります」「けふはよきていけなり」。未來「ばんほどは雨がふりませう」「こよひは雨ふるべし」。他「かふおつしやるけれど」「かくあるべけれど」、自「かふはいふもの、」「かくはいへども」。此とほりにて、雅俗一致たる

をしるべし。雅俗は一致なるをまちがへたるより、歌よみは惣髪になり、烏帽子・狩衣でもきたひよふになる。俗なることにても例があらばゆるすも私也。例なくともかまはぬこと也。

70 後來の詮はおしあての説おほし。英男にあざむかるべからず。本居翁の説、古事のせんさくななどは、尤益あることおほけれど、一ツの道などたてられたるは私にして、後人の批判をまぬがれず。道にかゝりたる書は、いふにおよばず、『美の、家つと』『玉あられ』などは、うべなひがたきことおほかり。太閤が三韓功(攻力)にひとしきことありて、苦心はおほく功はなくなきがおほし。これ勢に乘じられたるものか。真淵翁の説はやましにちかきことおほかり。契沖の説いづれもよりどころありてよろしとすべし。

71 懷紙を本居風にかくには、歌とのみかけるも私也。これは和歌とかくべし。懷紙(マ)の九十九九三三は堂上方の字配りなるに、私意をくはへて歌とかくをわらふべし。

72 本居風にては近世風といへば、しきりにきらへど、近世風則自然一転しきたるものにて、さのみすべからず。此所の取捨、心あるべし。

73 みだりに人に添削をねがふは、はぬきに齒をみするがごとく、其人なほさんとおもふが体なれど、用をうしなふ事ありて、この意味自然わきまへたる人に見すべし。

74 作例は、類題和歌集は誤おほければ、『題林愚抄』『草庵集』『為家卿集』『月清集』『新葉集』などよし。すこし上達したれば、二十一代集『万葉』『夫木集』などを常にみて、歌よむ場にかゝつては、さきにいふごとく作例を見ず、書を読み様にするがよし。

75 歌は達者を一とす。丹練遅吟はあしなへのごとく、達者の歌は勢也。遅吟の歌は勢なし。

76 めづらしきことをよむは尤よろしけれど、あまりめづらしすぎては、おもしろからず。近來朝がほがやれば、種々のあさがほが出来る様になつたれど、なほ碧花にすぐるはなし。

77 学問するにはわがためにまなぶべし。人のためをおもふべからず。人のためまなば、無益のこととせんさくせんとし、わからぬこともあきらめんとして、かへりて僻説いづるもの也。

78 昔の人の金玉は、ねりみがきたるかひもありけん。今のよの風体はたゞそのまゝなるがよし。いかほどみがきたるも瓦礫にては光を生じんや。

79 師ははしご也。そのはしごをかけて、わがいたらんとおもふところのほりたらば、はしごはすて、わが色をたつべし。さりとて師の恩はわするべからず。忘筌のいましめ意味ふかし。

80 題詠のはじまりは、「^{〔花〕}花入花灘暗」といふ題がはじまりにて、うたの会といふもこれらが始なるべし。『日本後紀』を案ずるに、詩の御会はをり／＼あれど、歌の会といふことみえず。よりておもふに、『万葉』の中、筑紫にて梅の歌のあるは、またく宴のさまなるが、これはつくしにてのことなれば、から風のうつりたるにて、集りて歌をよむは、もとは唐風のうつれるものと見ゆ。もとより『万葉』より『古今』までの間は、詩のかたはびこりたるものと見えて、さしもの菅公すら詩文に御名たかくして、猶その時代の君たちは詩文の名あるにも、そのさまはしるきを、いさ、かおくれて貫之・躬恒などいふ人いで、詩文より歌の名たくなり、やふ／＼もとのごとく歌は行れて、『古今集』てふもの出来すより、又歌の代となれりと見ゆ。よりて実情はうたのかたはやけれど、風流のもてあそびものとなれるは、詩の風情のうつりたるなれば、歌人は詩のことをみだりにそしるべからず。今のよの歌は実情より風流のかた重きなれば、風情は詩よりして意味は歌をむねとすべからんや。

81 幽玄はその人の心にあり。をしへにあらず。自得せずして幽玄の境にいりがたし。

82 上の句に得意の趣向あらば、下の句をさりとながすべし。下の句に^{〔四カ〕}肝目の趣向あらば、上の句を平意にすべし。詞のつみたる歌はよろしからず。

83 今ひとつ意みを加たくおもふところは、そのまゝにおくべし。し

ひて意をくはへんとはなれものになる。

84 歌はながすべからず。よどむべからず。

85 歌は強^{前カ}君の間にあり。力あるも賞しがたく、よわきはなほさら也。

86 人の歌を難ずる人、おほくはわがこのまざる歌はあしくいひなし
て、その難のおほくはわたくしの難也。これわがこのむ食はうましと
いひ、わがきらふ食はうまからずといふにひとしき私也。わがこのむ
所このまざる所はしばらくおきて、その歌の高拙を論ずることもとよ
り也。よく作者の意をおもひやるにしかず。この癖おほくは人の師た
る人にことさらあり。古人の歌まで、『古今』はきらひ『新古今』はす
きなど、いふわたくし人は、ことに論ずるにたらず。

87 長歌は古体をよむべし。近体は何の益かあらん。古風の長歌をよ
めば、『万葉』腹に入て力量となる。

88 名をうることに第一の非見識なり。たゞおのが心のまゝにして、お
のづから名のあらはるゝをまつがよし。

89 詞のはたらきは益なり。「おもはせて」、「おもはして」にて意は通
ずる也。「おもはず」といひたらばこそいかゞならめ。ことにひとつ
の詞を元として、これは何段これは何段といふより、古人に例のなき
つかひざまさへ出来るは、かへりてはたらきのちがふといふ詞より罪

ふかゝるべし。

90 情は木のごとく、意味は枝葉のごとく、趣向は花のごとし。より
て先、情を第一とす。枝葉を二とす。木ぶり枝葉あしくては、花あり
てもかひなく、詞を重にする人は、木枝葉にかはま^マずして、やゝもすれ
ば生木の花をさかせすぎて、木をからすにいたる。この心得あるべし。

91 歌は、雲の上人の情を通じんとして下情に通ずるをおもはぬ人お
ほけれど、雲の上人の情はきはめずでありなん。きはめたりともおよ
びがたし。たゞ下情に通ずるをよしとす。さなくては意味ふかゝらず
して、人をおかんじさせがたし。

92 情と意味はおなじ様にてことなり。本居風いたく意味をむねとし
て情あさし。意味をえたる人はあれど、情をえたる人はすくなし。
情を一とし、意味を二とし、趣向を三とし、詞を四とす。詞をいとふ
てみだりにつかはざる人は、道ゆく人のかごにのるがごとく、其要を
失う。

93 人の歌をみるには、我意をはなれて歌の大体を論ずべし。今のよ
のさまをみるに、師といはるゝ人も、おほくはわが好きなをほめ、
わがこのまざる風をきらふ。これおほやけにあらず。先達の歴々があ
またあつまりてえらまれたる撰集にすら、わが氣にいるはすくなく、
なにもおもはぬがおほきは、これ好き嫌のわたくしのするところにて、
その歌の拙きにあらず。さしもその時々^マの歴々のえらばれたる集

に拙きうたあらんや。これその人々の心による。『万葉』もよし、『新古今』もよし、『玉葉』『風雅』もよし、『夫木』もよし、とおもふがよし。『源氏物語』をおきて外の書は皆よしとおもふべし。かれをとりこれをとりせられたるにては、みる人の癖意にて、おほやけの論のたぬ也。

94 『源氏物語』は名文いふまでもなけれど、元来婦人の作故、大体よわし。それをまなべば、うきところは、ならはずしてよわき所をならふ。大丈夫の男子、婦人のま似をすることいかなることぞや。先達もいまだこの境をまぬがれたるをきかず。おのれひそかに古人未発の卑見を得たること、自負たれり。

95 本居風の道はかりにも尊ぶべからず。つくりものにて、よにいふ山師に似たり。たゞ説註をとふとぶべし。

96 書をよむにはたゞ歌よむためをむねとして、この文句その意味を歌につかはむとすべし。かくのごとくなれば、読書おのづから腹中に入。その心なくして書をよめば、食物の形をみて味を論ずるがごとし。書は、物取てつかひ様をしらずしては、何の益なし。学医の匕のまはらぬといふこと尤なること也。これ学問のさまたぐるにあらず、書に溺せらるゝ也。

97 歌は読書三分、執行二分、よむこと五分とすべし。学問執行かてば、歌おのづからのびらかならず。

98 里人しこみにせんとするは、甚不心得也。

99 今のよ歌を評するに、理屈がおほく、理屈をはなれては又窮理をいふ。歌は草木の花のごとく理外のものにて、草木意味は草わりていはれぬところあり。木をわつたとて、木の中に花のなきがごとし。可解不可解を則幽玄といふ。可解の意はわかつて、不_レ解_レ所を得たる人なし。

100 『万葉』は『詩経』に似たり。『古今』『後撰』は唐にちかし。貫之・躬恒は李杜のごとし。

本研究はJSPS科研費「小津久足の文事」(15K16692)による研究成果の一部である。